雨ふり

泉鏡太郎

青空文庫

一瀬を低い瀧に颯と砕いて、爽かに落ちて流るゝ、桂川の溪流を、石疊で堰いた水の上を堰の其の半ばまで、足駄穿で渡つて出て、貸浴衣の尻からげ。梢は三階の高樓の屋根を抽き、枝は川の半ばへ差蔽うた槻の下に、片手に番傘を、トンと肩に持たせながら、片手釣で輕く岩魚を釣つて居る浴客の姿が見える。

片足は、水の落口に瀬を搦めて、蘆のそよぐが如く、片足は鷺の眠つたやうに見える。……堰の上の水は一際青く澄んで靜である。其處には山椿の花片が、此のあたり水中の岩を飛び岩を飛び、胸毛の黄色な鶺鴒の雌鳥が含みこぼした口紅のやうに浮く。

雨はしと〳〵と降るのである。上流の雨は、うつくしき雫を描き、下流は繁吹に成つて散る。しと〳〵と雨が降つて居る。

このくらゐの雨は、竹の子笠に及ぶものかと、半纏ばかりの頬被で、釣棹を、刺いて見しよ、と腰にきめた村男が、山笹に七八尾、銀色の岩魚を徹したのを、得意顔にぶら下げつゝ、若葉の陰を岸づたひに、上流の一本橋の方からすた〳〵と跣足で來た。が、折からのたそがれに、瀬は白し、氣を籠めて、くる〳〵くる、カカカと音を調ぶる、瀧の下なる河鹿の聲に、歩を留めると、其處の釣人を、じろりと見遣つて、空しい渠の腰つきと、我が獲ものとを見較べながら、かたまけると云ふ笑方の、半面大ニヤリにニヤリとして、岩魚を一振、ひらめかして、また、すた〳〵。……で、すこし岸をさがつた處で、中流へ掛渡した歩板を渡ると、其

處に木小屋の柱ばかり、圍の疎い「獨鈷の湯。」がある。――屋根を葺いても、板を打つても、一雨強くかゝつて、水嵩が増すと、一堪りもなく押流すさうで、いつも然うしたあからさまな體だと云ふ。――

半纏着は、水の淺い石を起して、山笹をひつたり挟んで、細流に岩魚を預けた。溌剌と言ふのは此であらう。水は尾鰭を泳がせて岩に走る。そのまゝ、すぼりと裸體に成つた。半纏を脱いだあとで、頬かぶりを取つて、ぶらりと提げると、すぐに湯氣とともに白い肩、圓い腰の間を分けて、一個、忽ち、ぶくりと浮いた茶色の頭と成つて、そしてばちや〳〵と湯を溌ねた。

時に、其の一名、弘法の湯の露呈なことは、白膏の群像とまでは行かないが、順禮、道者、村の娘、嬰兒を抱いた乳も浮く……在の女房も入交りで、下積の西洋畫を川で洗濯する風情がある。

この共同湯の向う傍は、淵のやうにまた水が青い。對岸の湯宿の石垣に咲いた、枝も撓な山吹が、ほのかに影を淀まして、雨は細く降つて居る。湯氣が霞の凝つたやうにたなびいて、人々の裸像は時ならぬ朧月夜の影を描いた。

肝心な事を言忘れた。――木戸錢はおろか、遠方から故々汽車賃を出して、お運びに成つて、これを御覽なさらうとする道徳家、信心者があれば、遮つてお留め申す。――如何となれば、座敷の肱掛窓や、欄干から、かゝる光景の見られるのは、年に唯一兩度ださうである。時候と、時と、光線の、微妙な配合によつて、しかも、品行の方正なるものにのみあらはるゝ幻

影だと、宿の風呂番の（信さん）が言つた。――案ずるに、此は修善寺の温泉に於ける、河鹿が吐く蜃気楼であるらしい。かた〳〵〃、そんな事はあるまいけれども、獨鈷の湯の恁る状態をあてにして、お出かけに成つては不可い。……

ゴウーンと雨に籠つて、修禪寺の暮六つの鐘が、かしらを打つと、それ、ふツと皆消えた。……むく〳〵と湯氣ばかり。堰に釣をする、番傘の客も、槻に暗くなつて、もう見えぬ。

葉末の電燈が雫する。

女中が廊下を、ばた〳〵と膳を運んで來た。有難い、一銚子。床の櫻もしつとりと盛である。

が、取立てて春雨のこの夕景色を話さうとするのが趣意ではない。今度の修善寺ゆきには、お土産話が一つある。

何事も、しかし、其の的に打撞るまでには、弓と云へども道中がある。醉つて言ふのではないけれども、ひよろ〳〵矢の夜汽車の狀から、御一覽を願ふとしよう。

先以て、修善寺へ行くのに夜汽車は可笑い。其處に仔細がある。たま〳〵の旅行だし、靜岡まで行程を伸して、都合で、あれから久能へ※つて、龍華寺――一方ならず、私のつたない作を思つてくれた齋藤信策（野の人）さんの墓がある――其處へ參詣して、蘇鐵の中の富士も見よう。それから清水港を通つて、江尻へ出ると、もう大分以前に成るが、神田の叔父と一所の時、わざとハイカラの旅館を逃げて、道中繪のやうな海道筋、町屋の中に、これが昔の本陣

だと叔父が言つただゞつ廣い中土間を奥へ抜けた小座敷で、お平についた長芋の厚切も、大鮪の刺身の新しさも覺えて居る。「いま通つて來た。あの土間の處に腰を掛けてな、草鞋で一飯をしたものよ。爐端で挨拶をした、面長な媼さんを見たか。……其の時分は、島田髷で惱ませたぜ。」と、手酌で引かけながら叔父が言つた——古い旅籠も可懷い。……

それとも、靜岡から、すぐに江尻へ引返して、三保の松原へ飛込んで、天人に見參し、きものを欲しがる連の女に、羽衣、瓔珞を拜ませて、小濱や金紗のだらしなさを思知らさう、ついでに萬葉の印を結んで、山邊の赤人を、桃の花の霞に顯はし、それ百人一首の三枚めだ……田子の浦に打出でて見れば白妙の——ぢやあない、……田子の浦ゆ、さ、打出でて見れば眞白にぞ、だと、ふだん亭主を彌次喜多に扱ふ女に、學問のある處を見せてやらう。たゞしどつち道資本が掛る。

湯治を幾日、往復の旅錢と、切詰めた懷中だし、あひ成りませう事ならば、其の日のうちに修善寺まで引返して、一旅籠かすりたい。名案はないかな、と字の如く案ずると……あゝ、今にして思當つた。人間朝起をしなけりや不可い。東京驛を一番で立てば、無理にも右樣の計略の行はれない事もなささうだが、籠城難儀に及んだ處で、夜討は眞似ても、朝がけの出來ない愚將である。碎いて言へば、夜逃は得手でも、朝旅の出來ない野郎である。あけ方の三時に起きて、たきたての御飯を掻込んで、四時に東京驛などとは思ひも寄らない。——名案はないかな——こゝへ、下町の姉さんで、つい此間まで、震災のために逃げて居た……元

來、靜岡には親戚があつて、地の理に明かな、粋な軍師が顯はれた。

「……九時五十分かの終汽車で、東京を出るんです。……靜岡へ、丁ど、夜あけに着きますから。其だと、どつちを見ぶつしても、其の日のうちに修善寺へ參られますよ。」

妙。

奇なる哉、更に一時間いくらと言ふ……三保の天女の羽衣ならねど、身にお寶のかゝる其の姉さんが、世話になつた禮かた／〃＼、親類へ用たしもしたいから、お差支へなくば御一所に、——お差支へ？……おつしやるもんだ！　至極結構。で、たゞ匆で連出す算段。あゝ、紳士、客人には、あるまじき不料簡を、うまれながらにして喜多八の性をうけたしがなさに、忝えと、安敵のやうな笑を漏らした。

處で、その、お差支のなさを裏がきするため、豫て知合ではあるし、綴蓋の喜多の家内が、折からきれめの鰹節を※へ買出しに行くついでに、その姉さんの家へ立寄つて、同行三人の日取をきめた。

——一寸、ふでを休めて、階子段へ起つて、したの長火鉢を呼んで曰く、

「……それ、何——あの、みやげに持つて行つた勘茂の半ぺんは幾つだつけ。」

「だしぬけに何です。……五つ。」

「五つか——私はまた二つかと思つた。」

「唯た二つ……」

「だつて彼家は二人きりだからさ。」
「見つともないことをお言ひなさいな。」
「よし、あひ分つた。」
五つださうで。……其を持參で、取極めた。たつたのは、日曜に當つたと思ふ。念のため、新聞の欄外を横に覗くと、その終列車は糸崎行としてある。——糸崎行——お恥かしいが、私に其の方角が分らない。棚の埃を拂ひながら、地名辭典の索引を繰ると、糸崎と言ふのが越前國と備前國とに二ヶ所ある。私は東西、いや西北に迷つた。——敢て子供衆に告げる。學校で地理を勉強なさい。忘れては不可ません。さて、どつち道、靜岡を通るには間違のない汽車だから、人に教を受けないで濟ましたが、米原で※るのか、岡山へ眞直か、自分たちの乘つた汽車の行方を知らない、心細さと言つてはない。しかも眞夜中の道中である。箱根、足柄を越す時は、内證で道組神を拜んだのである。
處で雨だ。當日は朝のうちから降出して、出掛ける頃は横しぶきに、どつと風さへ加はつた。天の時は雨ながら、地の理は案内の美人を得たぞと、もう山葵漬を箸の尖で、鯛飯を茶漬にした勢で、つい此頃筋向の※さんに教をうけた、市ヶ谷見附の鳩じるしと言ふ、やすくて深切なタクシイを飛ばして、硝子窓に吹つける雨模様も、おもしろく、馬に成つたり駕籠に成つたり、松並木に成つたり、山に成つたり、嘘のないところ、溪河に流れたりで、東京驛に着いたのは、まだ三十分ばかり發車に間のある頃であつた。

水を打つたとは此の事、停車場は割に靜で、しつとりと構内一面に濡れて居る。赤帽君に荷物を頼んで、廣い處をずらりと見渡したが、約束の同伴はまだ來て居ない。――大※りには成るけれど、呉服橋を越した近い處に、バラツクに住んで居る人だから、不斷の落着家さんだし、悠然として、やがて來よう。

「靜岡まで。」

と切符を三枚頼むと、つれを捜してきよろついた様子を案じて、赤帽君は深切であつた。

「三枚？」

「つれが來ます。」

「あゝ、成程。」

突立つて居ては出入りの邪魔にもなりさうだし、とば口は吹降りの雨が吹込むから、奥へ入つて、一度覗いた待合へ憩んだが、人を待つのに、停車場で時の針の進むほど、胸のあわたゞしいものはない。「こんな時は電話があるとな。」「もう見えませう。――こゝにいらつしやい。……私が行つて見張つて居ます。」家内はまた外へ出て行つた。少々寒し、不景氣な薄外套の袖を貧乏ゆすりにゆすつて居ると、算木を四角に並べたやうに、クツションに席を取つて居た客が、そちこちばら〳〵と立掛る。……「やあ」と洋杖をついて留まつて、中折帽を脱つた人がある。すぐに私と口早に震災の見舞を言交した。花月の平岡權八郎さんであつた。

「どちらへ。」「私は人を一寸送りますので。」「終汽車ではありますまいね。それだと靜と

しては居られない。」「神戸行のです。」「私はそのあとので、靜岡まで行くんですが、糸崎と言ふのは何處でせう。」「さあ……」と言つた、洋行がへりの新橋のちやきゝも、同じく糸崎を知らなかつた。

　此の一たてが、ぞろ〳〵と出て行くと、些と大袈裟のやうだが待合室には、あとに私一人と成つた。それにしても靜としては居られない。……行——行と、呼ぶのが、何うやら神戸行を飛越して、糸崎行——と言ふやうに寂しく聞える。急いで出ると、停車場の入口に、こゝにも唯一人、コートの裾を風に颯と吹まどはされながら、袖をしめて、しよぼ濡れたやうに立つて、雨に流るゝ燈の影も見はぐるまいと立つて居る。

「來ませんねえ。」

「來ないなあ。」

　しかし、十時四十八分發には、まだ十分間ある、と見較べると、改札口には、知らん顏で、糸崎行の札が掛つて、改札のお係は、剪で二つばかり制服の胸を叩いて、閑也と濟まして居らるゝ。此を見ると、私は富札がカチンと極つて、一分で千兩とりはぐしたやうに氣抜けがした。が、ぐつたりとしては居られない。改札口の閑也は、もう皆乘込だあとらしい。「確に十分おくれましたわね、然ういへば、十時五十分とか言つて居なすつたやうでした。——時間が變つたのかも知れません。」恁う言ふ時は、七三や、耳かくしだと時間に間違ひはなからう。——わがまゝのやうだけれど、銀杏返や圓髷は不可い。「だらしはないぜ、馬鹿にして居る。」

が、憤つたのでは決してない。一寸の旅でも婦人である。髪も結つたらうし衣服も着換へたらうし、何かと支度をしたらうし、手荷もつを積んで、車でこゝへ駈けつけて、のりおくれて、雨の中を歸るのを思ふとあはれである。「五分あれば間にあひませう。」其處で、別の赤帽君の手透で居るのを一人頼んで、その分の切符を託けた。こゝへ駈けつけるのに人數は恐らくなからう、「あなた氣をつけてね、脊のすらりとした容子のいゝ、人柄な方が見えたら大急ぎで渡して下さい。」畜生、驕らせてやれ——女の口で赤帽君に、恁う言つた。

「お氣の毒様です。——おつれはもう間に合ひません。……切符はチツキを入れませんから、代價の割戻しが出來ます。」

もう動き出した汽車の窓に、する〳〵と縋りながら、

「お歸途に、二十四——と呼んで下さい。その時お渡し申しますから。」

糸崎行の此の列車は、不思議に絲のやうに細長い。いまにも遙な石壇へ、面長な、白い顔、褄の細いのが駈上らうかと且つ危み、且つ苛ち、且つ焦れて、窓から半身を乗り出して居た私たちに、慇懃に然う言つてくれた。

——後日、東京驛へ歸つた時、居合はせた赤帽君に、その二十四——のを聞くと、丁ど非番で休みだと云ふ。用をきいて、ところを尋ねるから、麹町を知らして歸ると、すぐその翌日、二十四——の赤帽君が、わざ〳〵山の手の番町まで、「御免下さいまし。」と丁寧に門

をおとづれて、切符代を返してくれた。――此の人ばかりには限らない。靜岡でも、三島でも、赤帽君のそれぞれは、皆もの優しく深切であつた。――お禮を申す。

淺葱の暗い、クツシヨンも又細長い。室は悠々とすいて居た。が、何となく落着かない。「呼んだら聞えさうですね。」「呉服橋の上あたりで、此のゴーと言ふ奴を聞いてるかも知れない。」「驛前のタクシイなら、品川で間に合ふかも知れませんよ。」「そんな事はたゞ話だよ。」唯、バスケツトの上に、小取※しに買つたらしい小形の汽車案内が一冊ある。此が私たちの近所にはまだなかつた。震災後は發行が後れるのださうである。

いや、張合もなく開くうち、「あゝ、品川ね。」カタリと窓を開けて、家内が抜出しさうに窓を覗いた。「駄目だよ。」その癖私も覗いた。……二人三人、乗組んだのも何處へか消えたやうに、もう寂寞する。幕を切つて扉を下ろした。風は留んだ。汽車は糠雨の中を陰々として行く。早く、さみしい事は、室内は、一人も殘らず長々と成つて、毛布に包まつて、皆寢て居る。

東枕も、西枕も、枕したまゝ何處をさして行くのであらう。汽車案内の細字を、しかめ面で恁う透すと、分つた――遙々と京大阪、神戸を通る……越前ではない、備前國糸崎である。と、發着の驛を靜岡へ戻して繰ると、「や、此奴は弱つた。」思はず聲を出して呟いた。靜岡着は午前まさに四時なのであつた。いや、串戯ではない。午前などと文化がつたり、

朝がつたりしては居られない。此の頃ではまだ夜半ではないか。南洋から土人が來ても、夜中に見物が出來るものか。「此奴は弱つた。」——件の同伴でないつれの案内では、あけ方と言つたのだが、此方に遠き慮がなかつた。その人のゆききしたのは震災のぢきあとだから、成程、その頃だと夜があける。——此の時間前後の汽車は、六月、七月だと國府津でもう明くなる。八月の聲を聞くと富士驛で、まだ些と待たないと、東の空がしらまない。私は前年、身延へ參つたので知つて居る。

「あの、此の汽車が、京、大阪も通るのだとすると、夜のあけるのは何處らでせうね。」

「時間で見ると、すつかり明くなるのは、遠江國濱松だ。」

と退屈だし、一つ遠江國と念を入れた。

「横に俥が二挺たゝぬ——彼處ですか。」

「うむ。」とばかりで、一向おもしろくも何ともない。

「其處まで行きませうよ。——夜中に知らぬ土地ぢやあ心細いんですもの。」

「飴ぢやあるまいし。」

と、愚にもつかぬことをうつかり饒舌つた。靜岡まで行くものが、濱松へ線路の伸びよう道理がない。

……しかし無理もない。こんな事を言つたのは恰も箱根の山中で、丁ど丑三と言ふ時刻であ

つた。あとで聞くと、此の夜汽車が、箱根の隧道を潜つて鐵橋を渡る刻限には、内に留守をした女中が、女主人のためにお題目を稱へると言ふ約束だつたのださうである。

「何の眞似だい。」

「地震で危いんですもの。」

「地震は去年だぜ、ばかな。」

然りとは雖も、その志、むしろにあらず捲くべからず、石にあらず、轉すべからず。……ありがたい。いや、禁句だ。こんな處で石が轉んで堪るものか。たとへにも山が崩るゝとか言ふ。其の山が崩れたので、當時大地震の觸頭と云つた場所の、剩へ此の四五日、琅※の如き蘆ノ湖の水面が風もなきに浪を立てると、うはさした機であつたから。

山北、山北。——鮎の鮓は——賣切れ。……お茶も。——もうない。それも佗しかつた。

が、家を出る時から、こゝでこそと思つた。——實は其の以前に、小山内さんが一寸歸京で、同行だつた御容色よしの同夫人、とめ子さんがお心入の、大阪遠來の銘酒、白鷹の然も黒松を、四合罎に取分けて、バスケツトとも言はず外套にあたゝめたのを取出して、所帶持は苦しくつてもこゝらが重寶の、おかゝのでんぶの蓋ものを開けて、さあ、飲るぞ！　トンネルの暗闇に彗星でも出て見ろと、クツシヨンに胡坐で、湯呑につぐと、ぷンとにほふ、と、かなで書けばおなじだが、其のぷンが、腥いやうな、すえたやうな、どろりと腐つた、青い、黄色い、何とも言へない惡臭さよ。——飛でもないこと、……酒ではない。

一體、散々〳〵の不首尾たら〳〵〃〵、前世の業でもあるやうで、申すも憚つて控へたが、もう默つては居られない。たしか横濱あたりであつたらうと思ふ。……寂しいにつけ、陰氣につけ、隨所停車場の燈は、夜汽車の窓の、月でも花でもあるものを——心あての川崎、神奈川あたりさへ、一寸の間だけ、汽車も留つたやうに思ふまでで、それらしい燈影は映らぬ。汽車はたゞ、曠野の暗夜を時々〳〵けつまづくやうに慌しく過ぎた。あとで、あゝ、あれが横濱だつたのかと思ふ處も、雨に濡れしよぼれた棒杭の如く夜目に映つた。確に驛の名を認めたのは最う國府津だつたのである。いつもは大船で座を直して、かなたに逗子の巖山に、湘南の海の渚におはします、岩殿の觀世音に禮し參らす習であるのに。……それも本意なさの一つであつた。が、あらためて祈念した。やうなわけで、其の何の邊であつたらう。見上げるやうな入道が、のろりと室へ入つて來た。づんぐり肥つたが、年紀は六十ばかり。卜頭から頬へ縦横に繃帶を掛けて居る。片頬が然らでも大面の面を、別に一面顔を横に附着けたやうに、だぶりと膨れて、咽喉の下まで垂下つて、はち切れさうで、ぶよ〳〵して、わづかに目と、鼻。繃帶を覗いた唇が、上下にべろんと開いて、どろりとして居る。動くと、たら〳〵と早や膿の垂れさうなのが——丁ど明いて居た——私たちの隣席へどろ〳〵と崩れ掛つた。オペラバツグを提げて、飛模様の派手な小袖に、紫の羽織を着た、十八九の若い女が、引續いて、默つて其の傍へ腰を掛ける。

と言ふうちに、その面二つある病人の、その臭氣と言つたらない。

お察しあれ、知己の方々〳〵。――私は下駄を引ずつて横飛びに逃出した。

「あゝ、彼方があんなに空いて居る。」

と小戻りして、及腰に、引こ抜くやうにバスケツトを掴んで、慌てて辷つて、片足で、怪飛んだ下駄を捜して逃げた。氣の毒さうな顔をしたが、女もそツと立つて來る。

此の様子を、間近に視ながら、毒のある目も見向けず、呪詛らしき咳もしないで、ずべりと窓に仰向いて、病の顔の、泥濘から上げた石臼ほどの重いのを、ぢつと支へて居る病人は奇特である。

いや特勝である。且以て、たふとくさへあつた。

面當がましく氣の毒らしい、我勝手の凡夫の淺ましさにも、人知れず、面を合はせて、私たちは恥入つた。が、藥王品を誦しつゝも、鯖くつた法師の口は臭いもの。其の臭さと云つては、昇降口の其方の端から、洗面所を盾にした、いま此方の端まで、むツと鼻を衝いて臭つて來る。番町が、又大袈裟な、と第一近所で笑ふだらうが、いや、眞個だと思つて下さい。のちに、やがて、二時を過ぎ、三時になり、彼方此方で一人起き、二人さめると、起きたのが、覺めたのが、いづれもきよとんとして四邊を見ながら、皆申合はせたやうに、ハンケチで口を押へて、げゞツと咽せる。然もありなん。大入道の眞向に寢て居た男は、たわいなく寢ながら、うゝと時々苦しさうに魘された。スチームがまだ通つて居る。しめ切つた戸の外は蒸すやうな糠雨だ。臭くないはずはない。

女房では、まるで年が違ふ。娘か、それとも因果何とか言ふ妾であらうか——何にしろ、私は、其の耳かくしであつたのを感謝する。……島田髷では遣切れない。

もう箱根から駈落だ。

二人分、二枚の戸を、一齊にスツと開くと、岩膚の雨は玉清水の滴る如く、溪河の響きに煙を洗つて、酒の薫が芬と立つた。手づから之をおくられた小山内夫人の袖の香も添ふ。

二三杯やつつけた。

阿部川と言へば、きなこ餅にとばかり心得、「贊成。」とさきばしつて、大船のサンドヰツチ、國府津の鯛飯、山北の鮎の鮓と、それぱつかりを當にして、皆買つて食べるつもりの、足柄に縁のありさうな山のかみは、おかゝのでんぶを詰らなさうに覗きながら、バスケツトに凭れて弱つて居る。

「なまじ所帶持だなぞと思ふから慾が出ます。かの彌次郎の詠める……可いかい——飯もまだ食はず、ぬまずを打過ぎてひもじき原の宿につきけりと、もう——追つつけ沼津だ。何事も彌次喜多と思へば濟むぜ。」

と、とのさまは今の二合で、大分御機嫌。ストンと、いや、床が柔軟いから、ストンでない、スポンと寢て、肱枕で、阪地到來の芳酒の醉だけに、地唄とやらを口誦む。

お前の袖と、わしが袖、合せて、

——何とか、何の袖。……たゞし節なし、忘れた處はうろ抜きで、章句を口のうちで、唯引

張る。……

露地の細道、駒下駄で――

南無三寶、魔が魅した。ぶく〳〵のし〳〵と海坊主。が――あゝ、之を元來懸念した。道其の衝にあたつたり。W・Cへ通りがかりに、上から蔽かぶさるやうに來た時は、角のあるだけ、青鬼の方がましだと思つた。

アツといつて、むつくと起き、外套を頭から、硝子戸へひつたりと顏をつけた。――之だと、暗夜の野も山も、朦朧として孤家の灯も透いて見える。……一つお覺え遊ばしても、年内の御重寶。

外套の裡から小さな聲で、

「……返つたかい。」

「もう、前刻。」

私は耳まで壓へて居た。

鰌の沼津をやがて過ぎて、富士驛で、人員は、はじめて動いた。

それもたゞ五六人。病人が起つた。あとへ紫がついて下りたのである。……鰌の沼津と言つた。雨ふりだし、まだ眞暗だから遠慮をしたが、こゝで紫の富士驛と言ひたい、――その若い女が下りた。

さては身延へ參詣をするのであつたか。遙拜しつゝ、私たちは、今さらながら其の二人を、

涙ぐましく見送つた。紫は一度宙で消えつゝ、橋を越えた改札口へ、ならんで入道の手を曳くやうにして、微な電燈に映つた姿は、耳かくしも、其のまゝ、さげ髪の、黒髪長く※たけてさへ見えた。

下山の時の面影は、富士川の清き瀬に、白蓮華の花びらにも似られよとて、切に本腹を祈つたのである。

興津の浪の調が響いた。

大正十三年七月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
初出：「苦楽　第二巻第一号」プラトン社
　　1924（大正13）年7月1日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※「燈《ともしび》」と「灯《ともしび》」の混在は、底本の通りです。
※「繃帶」に対するルビの「ほうたい」と「はうたい」、「二人」に対するルビの「ふたり」と「ににん」の混在は、底本の通りです。
※表題は底本では、「雨《あめ》ふり」となっています。
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。
入力：門田裕志
校正：岡村和彦
2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雨ふり

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/